

池田光幸先生のご退任によせて

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科・科長 安岡 馨

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科および本学人文学部臨床心理学科の開設、そして心理臨床センターの発展と充実に多大な貢献を果たしてこられた池田光幸教授が、平成19(2007)年3月31日をもって退職されました。大変残念なことで、私どもの喪失感筆舌に尽くしがたいものではありますが、7年間にわたるご功績に対し、ここに深甚なる謝意を表するしだいであります。

池田先生は、昭和19(1944)年に福島県で生まれ、横浜で育ち、昭和43(1968)年3月に東京大学教育学部を卒業されました。学生時代より佐治守夫先生の薫陶を受けられながら、昭和49(1974)年に東京大学教育学研究科教育心理学専攻博士課程を単位取得満期退学(教育学修士)され、当時の神奈川県立精神衛生センター(現・神奈川県立精神保健福祉センター)に就職されました。ここでは相談部門に所属され、相談活動の実態を調査研究されて、相談活動のあり方の本質を深められました。その後、縁があって昭和52(1977)年7月、まさに有珠山が噴火した日に北海道にやってこられ、北海道立精神衛生センター(現・北海道立精神保健福祉センター)に就職されました。ここでは、主にアルコールと薬物依存の問題に精力的に取り組まれました。そして、昭和58(1983)年には、札幌医科大学衛生短期大学部(現・札幌医科大学保健医療学部)に移られ、そこで看護師、作業療法士、理学療法士などの養成にたずさわる一方、家庭生活総合カウンセリングセンターのカウンセラー養成にも尽力されました。

このように、池田先生は臨床面でのお仕事の他に、人材養成という教育面でもそのお力を発揮されました。とくに、もともとご専門はカウンセリングであり、カウンセラーの養成を最も大切に考

えられて、そこに情熱をかたむけてこられました。この「人を育てる」ことの重視は、「言葉のやりとりの中に人格の交流を目指す」ことをカウンセリングの基本と考え、「相手を自分と同じ1人の人間として考え、相手とどう関われるかをいつも考える」という池田先生の基本思想に裏打ちされていました。この「人間中心主義」とも言える信条が、池田先生の哲学であり真骨頂のように私は理解しています。

その後、札幌学院大学で臨床心理士の養成のために大学院を開設するということになり、平成12(2000)年3月の、奇しくも有珠山が再噴火した日に、その学識経験の豊かさにより乞われて本学に赴任されました。最初は、本学人文学部人間科学科の教授として教鞭をとられるかたわら、平成12(2000)年4月の大学院臨床心理学研究科の開設と充実に尽力されました。さらに、平成13(2001)年4月には、新設された本学人文学部臨床心理学科の初代の学科長に就任されました。ちなみに、当時の専任教員陣(以下、敬称略)には、池田先生を筆頭に、12名の綺羅星のごとき錚々たるメンバーが揃っていました。清水信介(現・北星学園大学)、小山充道(現・名寄市立大学)、徳田仁子(現・京都光華女子大学)、岩壁茂(現・お茶の水女子大学)、中原睦美(現・鹿児島大学)、滝沢弘忠、森直久、小林好和、松本伊智朗、津田光輝の諸先生です。また、14名の優秀な非常勤講師もそろい、北海道内でもトップレベルの陣容での船出でした。

以後、平成14年(2002)年には、清水信介教授(初代の大学院の研究科長)の後継として、2代目の研究科長に就任され、同時に心理臨床センター長も兼任され、大学院の基礎作りとその発展

に全力をそそがれました。その結果、平成13(2001)年には日本臨床心理士認定協会による北海道で初めて唯一の第1種指定校となり、平成15(2003)年の実地調査では全国で最高ランクの「A」評価を得て、現在に至っています。このように今日の大学院の隆盛の基礎をつくられたのは、池田先生のご貢献ぬきには考えられません。

こうした本学におけるご活躍の他に、池田先生のこれまでの主な公的活動としては、日本心理臨床学会(理事, 1991~1998年), 日本アルコール・薬物医学会(評議員, 1985年~現在), 日本精神衛生学会(評議員, 1996年~現在), 日本電話相談学会(理事, 1997年~現在) 日本臨床心理士会北海道地区会(会長, 1990~1999年), など要職を歴任されています。また、主な業績として、著書には「心理臨床の探究—ロジャースからの出発—」(共著)(有斐閣), 「アルコール症の精神療法」(共著)(金剛出版), など多数があります。

さて、この度のご退職に関してですが、昨年からは、大学院でのお仕事はもう一段落したとお考えになったのでしょうか、「もう疲れましたので、職を辞し、後は自分のために生きたいと思います」とおっしゃられ、任期半ばの退職を決断されました。よく考えますと、これまでの人生がいわば他者のために尽くされてきたのですから、そろそろ自分のためだけの人生があってもよいのではないかという池田先生の吐露に、私自身は妙に納得し、内心はうらやましくも感じたものでした。

ここで個人的なことに少し触れさせていただくと、ひとことでは言えませんが、池田先生は「有徳の人」です。年齢は私より2ヶ月ほど若いのですが、これまで私が学兄として尊敬してきた理由のひとつに、その人柄があります。その例証のひとつをあげてみますと、池田先生が怒りを示されたところを私はこれまで一度も見たことがありませんし、ご自分の自慢話も他人の悪口も聞いたことがないことです。これは、なかなかできそうでできないことです。私の座右の銘のひとつに崔子玉の「無

道人之短、無説己之長」というのがあります。つまり、「人の短所や欠点を言ってはならぬ、自分の長所を自慢してはならぬ」という意味です。池田先生はこのことを具現化している人なのです。とくに、怒りを余り示されないことについてですが、これまでの人生で、おそらく多くの苦難に遭遇され、ときにはお腹立ちになることも多々ありだったに違いないのですが、池田先生はそれらを、あたかも全部のみこんで、じっとおひとりでお心の中にかみしめておられるような、忍耐強いところがありました。それだけに、今後は自分のために尽くしたいという強い願いは、私には素直に理解できるような気がしたわけです。

とはいえ、池田先生が去った後の、大学院臨床心理学研究科と学部の臨床心理学科の将来に思いをはせるとき、正直申して、残された私どもの前途は多くの課題が山積しておりますので、これまでにない身のひきしまる緊張を感じています。池田先生はじめ諸先輩が残してくれました良き伝統を守り、さらに時代の厳しい変化に適切に対応しながら、人間の「心を理解し、心を癒し、心を育てる」という臨床心理学の目標の達成に向けて、これからも地道な努力を続けようとお心新たにしているところです。

池田先生、本当に長い間、大変お疲れ様でした。今後のご健祥を祈念し、これまでのご業績に敬意をこめて、私の好きな歌の一節をお送りすることで、結びとします。

“花咲き 花はうつろいて
露おき 露のひるがごと
星霜移り 人は去り
舵かとる舟師こは変わるとも
我わがのる舟は 常とこしえに
理想の自治に進むなり”

(一高察歌：「嗚呼玉杯に花うけて」より)